

幕末期の薩摩藩とお雇い外国人鉱山技師

—ジャン＝フランソワ・コワニエの来日に関する新情報—

The Satsuma Clan at the end of the Tokugawa period and a foreign mining engineer: A novel information about the coming of Jean=François Coignet

白井 智子

Satoko SHIRAI

I はじめに

明治元年、明治新政府は政治的・経済的変革を開始したが、西洋諸国との交流が進展するに従い、徳川幕府の長い鎖国政策がもとで、日本が欧米列強の行政・産業・教育・軍事などあらゆる面において遅れを取っていることを痛感した。新政府は、外国に比肩できる国家の建設を目指し、政治・経済面での新制度の確立、近代産業の振興、新時代を担う人材の育成、国際競争激化の下での軍事力整備など、国家体制の近代化を図ることが急務であると考えた。しかし、そのためには莫大な資金を要した。そこで打ち出されたのが富国強兵・殖産興業政策の確立とその一環としての鉱山事業の拡充であった。政府は、急に鉱山事業を近代化させ、できるだけ早く莫大な資金を得るために、西洋の最新技術を身に付けた外国人専門家、いわゆる「お雇い外国人」を雇用することに決めた。

最初に外国人技師を投入したのは、官行鉱山第1号の生野銀山であった。1868(明治元)年、明治政府最初の「お雇い外国人」として生野銀山の開発のために雇用されたのが、フランス人鉱山技師、ジャン＝フランソワ・コワニエである。コワニエは、1837(天保8)年フランスのロワール県サンテティエンヌ市に生まれ、1855(安政2)年同地のサンテティエンヌ鉱山学校¹で鉱山学を専門に学んだ。卒業後は、フランス本国の他、スペイン、アルジェリア、マダガスカル、メキシコなどで鉱山実務に従事、多くの鉱山開発の経験を積んだ。1867(慶応3)年、コワニエ30歳の時、薩摩藩の領地内の地質調査と鉱山開発を目的に薩摩藩に雇用され来日、約10か月間、鹿児島に滞在した後、1868(明治元)年9月、明治新政府に雇い入れられ、幕府から新政府へ所有が移った直後の閉山に近い状態であった生野銀山の刷新を命じられた。コワニエは、約10年間、自分の采配で雇用したお雇いフランス人23名と共に、生野銀山開発に労力を注いだ。その結果、日本の殖産興業政策や日本の近代化の後押しをする大きな功績を残した。

¹ 正式には Ecole des Mineurs de Saint-Etienne 「サンテティエンヌ坑夫学校」、現在の名称は Ecole nationale supérieure des Mines de Saint-Etienne 「サンテティエンヌ国立高等鉱山学校」

コワニエの鉱山開発に功績に関する研究は、論者を含め、これまで日仏交流史学や科学技術史学、鉱山学分野で少なからず行われてきたが、彼の来日に関する詳細な研究はまだ試みられていない。本稿では、論者がフランスで発見したコワニエ来日当初のフランスの友人に宛てた手紙と当時の史料をもとに、コワニエの来日事情と来日当初の動向について当時の日本や海外情勢と合わせて考察する。

II 薩摩藩とコワニエの来日

2.1 コワニエ来日経緯に関する文献

コワニエの来日経緯には、薩摩藩が大きく関係している。薩摩藩とコワニエとの接点に関して記述されている史料はあまり残っておらず、現在確認できているのは、『薩摩海軍史』²と『五代友厚伝記資料』³に収められている当時の関係者の書簡や記録のみである。前者は、昭和初期の海軍中将東郷吉太郎が編者となり、1928 - 1929（昭和3 - 同4）年に島津家編纂所から出版した上・中・下3巻からなる薩摩藩の歴史書である。主として1809 - 1872（文化6 - 明治5）年の幕末63年間の島津斉興・斉彬・忠義3代の薩摩藩の洋式工業文明、外国折衝、藩内政などについて、藩内外の基礎史料を基に書かれている。後者の『五代友厚伝記資料』は、薩摩藩士五代友厚（通称、才助）⁴関連資料群の中から資料を選択して翻刻したものである。内容は、伝記、書簡、貨幣、貿易、鉱山、工業、政治、外交などで、4巻からなる。

両文献の中にはコワニエの名が散見され、これらを総合すると、コワニエ来日経緯の一端を読み取ることができる。両文献を基に薩摩藩の幕末の外交関連事項を踏まえながら、まずコワニエ来日に至る経緯を考察する。

2.2 薩摩藩と五代友厚

幕末、薩摩藩は攘夷論を主張していた。しかし、1863（文久3）年7月、前年の「生麦事件」に端を発した「薩英戦争」でイギリスの捕虜となった薩摩藩士の五代友厚と松木弘安（後の寺島宗則）⁵は、イギリス人と交流するうちに外国との接触の必要性を痛感した。イギリスの捕虜から逃れ、暫くの間、長崎のイギリス商人グラバー邸に潜伏後⁶、1864（元治元）年5月頃、捕虜・脱藩の罪が解かれた五代は、薩英戦争とグラバーから得た西洋文明の知識から、薩摩藩の国策のための自分の意見を記した長文の意見書を薩摩藩役所に提出した。以下がその冒頭部である。

² 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』上巻～下巻、原書房、1968年。

³ 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第一巻～第四巻、東洋経済新報社、1971年～1974年。

⁴ 五代友厚（通称：才助、1836-1885）薩摩国鹿児島生まれ。薩摩藩士、実業家、大阪経済界の重鎮の一人。

⁵ 寺島宗則（1832-1893）元の中は松木弘安。政治家、伯爵、日本の電気通信の父、第4代外務卿。1862年、幕府の第1次遣欧使節（文久遣欧使節）に通訳兼医師として参加。明治維新後、遣欧使節での経験を活かし、外交官となる。

⁶ グラバー邸での潜伏については、『薩摩藩海軍史』（中巻、公爵島津家編纂所、原書房、1968年、pp. 865-866）に記されている。

五州亂れて如麻、和すれば則盟約して貿易を通し、和せされは則兵を交へて互に其國を襲ひ奪吞す。右は其則地球上一般の風俗天數の然らしむる處如何ともする事不能、開成強大の英佛の如きも鎖國の行業難立形勢に罷成申候處、御開海以來勤王攘夷を唱へ、天下に周旋同志を集め、自國の政を掌握する様の大言を吐き愚民を欺迷し、其上口演にのみ走り浪士共増長いたし、攘夷の功業不成を不知、國政を妨げ反て内外の大亂を醸し出し、自滅を招くの兆、嗚呼可歎。(中略) 頻に西洋諸國と雖とも、或は鎖國或は開國、終に其理を實驗研究して富國強兵にし、大に開成して天下を横行するに至り申候。(「五代才助上申書」)⁷

五代は、鎖國をしたままでは國政を危うくするどころか、自滅する恐れがある故、世界中を席卷するようになった強國のイギリスやフランスに習って開國すべきである、と攘夷論を批判した。そして、攘夷論を廃して、「開國と國際貿易」、「富國強兵」さらには「人材育成と西洋機械導入を目的とした西洋諸國への留学生派遣」を提言する建白書を藩主に提出、直言した。

中でも「留学生派遣」に関して詳細な提示と提案を行った。例えば、「英佛兩國へ遊學人數拾六人」⁸「内四人は追々御家老職にても被仰付候、貳人は御軍賦役の内より御人選」⁹と、留学生の人数と人選の他、これに掛かる運賃や費用を細かく計算して提示した。さらに「右人數は英佛の軍務、地理、風俗、巨細に見分いたし罷歸り候様被仰付度奉存候」¹⁰などと、彼らがイギリスとフランスですべきことや、学校・病院・幼稚園の視察、農業耕作・銃薬製造・金銀銅鉄採掘のための機械や軍艦・大砲の購入などを提案している¹¹。

その後、五代と共にイギリスの捕虜となっていた松木弘安も加わり、2人で「當方の時期に於ては海外に遊學せしめ、西洋の文物を研究せしめされは世界の大勢に遅れ、日本の開發に資するに足らず」¹²と上申、薩摩藩士をイギリスに留学させることを強く求めたところ、本提案は採択された。

薩摩藩遣英使節団として選ばれたのは五代、松木の他、森有礼(変名：沢井鉄馬)¹³、朝倉盛明(変名：朝倉省吾)¹⁴ら15歳から28歳までの15名の留学生(通称：薩摩藩英国留学生)ら計19名であった。当時、まだ各藩が海外に使節や留学生を派遣することは

⁷ 「五代才助上申書」(公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史(中)』原書房、1968年、pp. 867-890所収)。

⁸ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968年、p. 876。

⁹ 同上、p. 877。

¹⁰ 同上、p. 877。

¹¹ 同上、pp. 877-883。

¹² 同上、p. 895。

¹³ 森有礼(1847-1889) 本名は森金之丞。薩摩藩士、外交官、政治家。一橋大学創設者。初代の文部大臣、明六社会長、東京学士会院(現、日本学士院)初代会員、明治の六大教育家、子爵。

¹⁴ 朝倉盛明(鹿兒島出身、1843-1925) 本名は田中静洲。生野出仕時代に朝倉盛明と改名する。研究については、吉田國夫「官營生野鉦山先覚・朝倉盛明」(『日本鉦業会・昭和59年度春季大会研究・業績発表講演会 別冊』1984年、ページ番号なし)がある。

許されていなかったため、幕府の鎖国の禁令を犯すこととなる一行は、脱藩した形を取り、それぞれに変名を与えられた。一行は、当時交流のあった長崎のイギリス商館グラバーが準備した船で、極秘裏に 1865（慶応元）年 3 月 22 日、薩摩郡串木野郷羽島村（現在の鹿児島県いちき串木野市羽島）から密出国した。

2.3 遣英使節団と政商モンブラン

一行のロンドンまでの旅程や現地での動静については、五代の日記「廻国日記」¹⁵の他、『薩藩海軍史』¹⁶所収の使節団員による日記や書簡から知ることができる。特に五代の「廻国日記」は、1865（慶應元）年 9 月 14 日（和暦：7 月 25 日。※以下、新暦と共に括弧内に和暦を記す）から同年 12 月 21 日（和暦：11 月 4 日）までほぼ毎日の視察や行動について記されており、一行の滞欧中の動静および幕末の日欧交渉の研究によく利用されている。

これらの文献によると、一行は、香港、シンガポールを經由し、同年 6 月 21 日（和暦：5 月 28 日）にイギリスのサザンプトンに着港後、即日ロンドンに入った。一行がロンドンに到着してまもない頃、フランスで最初の日本語教師として知られるパリの東洋語学校の日本語教師、レオン・ド・ロニー¹⁷が一行に面会に来た。彼は松木弘安とは旧知の間柄であった。なぜなら、松木は、3 年前に竹内下野守を代表とする幕府の第 1 次遣欧使節（文久遣欧使節）に通訳兼医師として参加していたからである。後日、ロニーは、滞日経験のある親日家で政商でもあるフランス国籍ベルギー貴族のシャルル・ド・モンブラン¹⁸をロンドンに同行し、一行に紹介した。

モンブランは五代らをベルギーやフランスの各種の工場に案内した。日本との政治的、貿易的関係の結託を策謀していた政商モンブランは、幕府との交渉に行き詰まっていたこともあり、五代に貿易会社設立の話を持ちかけた¹⁹。薩英戦争の体験から、薩摩藩を強化するためには、西洋の武器や機械を輸入して藩の補強と近代化に努め、さらに紡績や製茶などの薩摩藩の産業を振興することが重要であると痛感していた五代は、モンブランの話は好都合だと捉え、1865（慶應元）10 月 15 日（和暦：8 月 26 日）ブリュッセルにおい

¹⁵ 表題は、「仏行而已ヲ記す 廻国日記」と記されている。この史料が初めて紹介されたのは、大久保利謙「五代友厚の欧行と、彼の滞欧手記『廻国日記』について」（『立教大学史学会』22 号、1962 年、pp. 20-41）である。この他、日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』（第 4 巻（政治・外交・雑纂・年譜）、東洋経済新報社、1974 年、pp. 29-36）にも所収されている。

¹⁶ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968 年、pp. 890-1030。

¹⁷ Léon de Rosny (1837-1868) フランス、ノール県ロース出身。独学で日本語を習得。1862 年、文久遣欧使節団訪仏の際、政府の命で通訳を務め、福澤諭吉や福地桜痴らと親交を重ねた。1863 年、フランス国立東洋語学校において、フランス最初の日本語教師となった。

¹⁸ シャルル・フェルディナン・カミーユ・ヒスラン・デカントン・ド・モンブラン (Comte Charles Ferdinand Camille Ghislain Descantons de Montblanc, Baron d'Ingelmunster, 1833 - 1894) フランスとベルギーの両国籍を持つ貴族、実業家、外交官。日本名は「白山伯」。

¹⁹ モンブランについては、宮永孝「ベルギー貴族モンブラン伯と日本人」（『法政大学社会志林』第 47 号の 2、法政大学社会学部学会、2000 年）とウィリー・ヴァンデワラは「旅と政変—幕府明治初期を旅行したモンブラン伯（白山伯）」（白幡洋三郎編『旅と日本発見—移動と交通の文化形成勢力』日本研叢書 43、国際日本文化研究センター、2009 年）参照。

て12カ条からなる仮契約を結んだ。

その契約の一条は「欧羅巴人と同商社をして、薩摩の領分にある金・銅・鉄・錫・鉛等の山を開き、或は種々製作機関・鉄工及武器を製造し、(中略)国を富(す)に要用なる機関を開(く)の商社を立てんが為(後略)」²⁰とある。すなわち、五代らは、西洋人と協力して藩の鉱山を開き、藩の財政基盤に鉱物資源を充当することを決めた。さらに、慶応3年12月19日(新暦1866年2月4日)にモンブランと交わした更なる詳細な条約書には「鉄製局、金山、銅山、錫山、石灰山、鉛山、右六ヶ條商社明誓の上、土質學の達人を相雇ひ、國中普く點檢して其場所に應し至當の業を可相開候」²¹(下線は論者による。以下同様とする)、また、五代の滞欧中の記録に所収の25項目からなる「建言ヶ條草稿」には、「欧羅巴より土質學の達人を相雇御領國中普探索すべき事」²²と記述がある。つまり、藩の鉱山開発のために西洋の優秀な鉱山師を雇用し、その鉱山師に薩摩藩領内の点検をさせて、的確な鉱山開発を行うことを決めた薩摩藩は、モンブランに鉱山師の紹介斡旋を依頼したのであった。

このような経緯で、モンブランより紹介されたのがコワニェであった。五代がパリでコワニェと会ったかどうかを証明できる資料は未発見のため不明であるが、この五代とコワニェの出会いは、後に、薩摩の山ヶ野金山、生野銀山、五代が下野後に経営した半田銀山の開発とつながり、日本の鉱山事業に大きな影響を及ぼすこととなる。

III モンブランとコワニェ

3.1 二人の接点

コワニェ来日のきっかけを作ったモンブランとコワニェの接点については、それに関する記述がなく、これまで解明されてこなかった。コワニェは、海外での地質調査や鉱山開発の仕事が多く、ほとんどフランスに居住することはなかったため、モンブランとの接点を見出すのは極めて困難であった。しかし、モンブランは鉱物資源や地質に詳しく鉱山士コワニェとの共通点があった。モンブランは1862(文久2)年に訪日した後、1865(慶應元)年に日本について記した著書 *Le Japon*²³の中で、次のように日本の地質や地下資源について詳細に紹介している。

この火山帯という環境の中(中略)世界のどんな国も、日本と同じだけの量の金は埋蔵していないであろう(中略)銀も同様で、産出量の多い鉱山と出会う。噂では、日本政府が金、銀、それに銅の鉱山を独り占めしているとのことである。(中略)ここでは鉛、石炭、鉄も豊富に見られる(中略)豊富に鉱物資源のある地面の真ん中から、温泉ならびに冷水が噴出している。(中略)さらに日本には水晶、碧玉、瑪瑙が見出される。

²⁰ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968年、p. 959。日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』(第4巻(政治・外交・雑纂・年譜)、東洋経済新報社、1974年、p. 50)にも同内容の条約が記されている。

²¹ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968年、pp. 973-974。

²² 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第4巻、東洋経済新報社、1974年、p. 54。

²³ 森本英夫訳『モンブランの日本見聞記』新人物往来社、1987年、p. 203。

この他、翌年、パリ地理学会²⁴の会報に掲載された「日本の現状に関する一般的考察」²⁵においても「皆が日本について一致して言うことは、鉱山の数の多さと資源の豊富さである（拙訳）」²⁶などと、日本の鉱山について記述し、鉱山への関心を示している。

パリの地理学会本部²⁷とパリ国立図書館²⁸所蔵の当時の学会会報と名簿の中に、モンブランの他、コワニエの名前も見つけることができた。2人は同じ1864（元治元）年に入会し（コワニエ2月、モンブラン5月）²⁹、退会時期もモンブラン1883（明治16）年、コワニエ1884（明治17）年か85（同18）年（1884年の名簿は散逸のため不明）、と、ほぼ同じである。コワニエとモンブランとの接点は、パリ地理学会であった可能性が高い。

五代が滞仏中の1865（慶應元）年12月15日（和暦10月28日）に開催された総会でモンブランは、「日本の現状と日本国内の西洋人の将来」について講演を行った³⁰。五代の12月17日（または18日）（和暦：11月1日か2日）³¹付の日記（「廻国日記」）には、「夜ニ入て、欧羅巴中地理学の衆会に行、数拾人一同食事を成す」³²と地理学会の集会と食事会に参加したことが記されている。地理学会の議事録³³を確認すると、総会は夜8時に始まっていることから、この衆会は間違いなく15日の地理学会の総会のことである。

因みに、コワニエとモンブランの入会前ではあるが、1861（文久元）年4月5日の総会において、日本学学者でフランス最初の日本語教師レオン・ド・ロニーが「日本文明」³⁴と題して講演を行っている。また、1868（明治元）年2月の地理学会の会報には、1862（文久2）年と1863（文久3）年にコワニエがおこなったマダガスカル³⁵の鉱山調査によって、有益な結果と情報をもたらされたことを称え、「同氏が日本において仕事をし、我々に実用的で役に立つ情報を送ってくれること期待する」（拙訳）³⁵旨が書かれている。またこの項

²⁴ パリ地理学会(Société de Géographie)フランス・パリに本部を置く、世界最古（1821年設立）の地理学会。

²⁵ Le comte de Montblanc, « Considérations générales sur l'état actuel du Japon par Bulletin de la Société de Géographie », cinquième série-tome onzième, janvier-juin, *Bulletin de la Société de géographie*, 1866, pp. 5-16.

²⁶ 同上、p. 9.

²⁷ 所在地は、パリ・サンジェルマン大通り184番地。原本が一部保管されている。

²⁸ パリ国立図書館旧館（リシュリュー通り）に、全部は揃っていないが、マイクロフィルムで保管されている。

²⁹ *Bulletin de la Société de géographie* (cinquième série-tome septième, janvier, 1864, p. 452) にコワニエの入会、同上、pp. 64-65) にモンブランの入会が認められたことが書かれている。

³⁰ 原題：« Mémoire sur l'état actuel du Japon et l'avenir des Européens dans ce pays »。 *Bulletin de la Société de géographie* (cinquième série-tome onzième, janvier-juin, 1866, p. 59) に当日の集会の議事録が掲載されている。

³¹ 「廻国日記」には日付の代わりに曜日だけが記されていることがほとんどであったため、後に大久保利謙が推定して発表した（大久保利謙「五代友厚の欧行と、彼の滞欧手記『廻国日記』について」『立教大学史学会』第22号、1962年）。現在、大久保の案が踏襲されているが、推定のため、時に正確でない場合もある。

³² 日本経済史研究会編『五代友厚伝記資料』第4巻（政治・外交・雑纂・年譜）、東洋経済新報社、1974年、p. 36。

³³ *Bulletin de la Société de géographie*, cinquième série-tome onzième, janvier-juin, 1866, p. 58.

³⁴ 原題：« La civilisation japonaise »

³⁵ *Bulletin de la Société de géographie*, cinquième série-tome quinzième, janvier-juin, 1868,

の後には「アジアはこれからも長く、旅行者、研究者、歴史家、言語学者、民俗学者の調査に開かれた最も壮大で最も興味深い領域である」（拙訳）³⁶と文章が綴られている。当時の地理学会会員は、日本を含め、未開発の極東の国であるアジアに大きな関心を寄せていたようだ。

コワニエは、モンブランから日本行きの提案を受け、日本への憧れと未知の国での鉱山調査と開発への興味から、来日前に参加したアフリカやアメリカ地質調査同様、やりがいのある仕事を求めて、モンブランの提案を受けたのではないだろうか。探検家コワニエ、政商モンブラン、西洋化を急ぐ五代の接点が見えてくる。

3.2 モンブランと英国留学生

英国留学生の中に、もう一人、後にコワニエと深く関わることになる人物がいた。それは、田中静洲（変名：朝倉省吾・当時 21 歳）である。朝倉（注：帰国後も変名の朝倉を名乗ったため、朝倉を使用する）は、早くから藩医により医術を学び、1860（万延元）年より 2 年間、長崎で蘭学を学んだ。1862 年（文久 2）年、藩命により帰藩し、翌年の薩英戦争に従軍した。1864（元治元）年に設立された開成所で句読師を務め、翌年英国留学生に任命された。留学時の役名は「醫師開成所句読師蘭學者」³⁷となっている。田中こと朝倉は、最初イギリスで英語や医学を学んでいたが、モンブランの勧めで中村宗見（変名：吉野清左衛門・当時 25 歳）³⁸と共に留学地をイギリスからフランスに変更した。その後、フランスで鉱山学やフランス語を修得し、フランス各地を視察した。五代の記録にはフランスに渡った朝倉についての記述がある。

拾封度、朝倉弘行仕廻料・蒸気車代として可被成下高³⁹

一 給金二百二十五封ヅツ

内、一 貳百封度

右は三ヶ月毎ニ五十封度、白山（論者注：モンブランの日本名）へ差送給度候。

二 貳拾五封度。

pp. 180-181.

原文：C'est là encore un excellent travail qui nous permet d'espérer que notre collègue nous donnera sur le Japon, où il est en ce moment, des notions pratiques et utiles.

³⁶ *Bulletin de la Société de géographie*, cinquième série-tome quinzième, janvier-juin, 1868, p. 181.

原文：L'Asie sera longtemps encore le champ le plus vaste et le plus intéressant ouvert aux explorations des voyageurs, aux recherches des historiens, des linguistes, des ethnographes.

³⁷ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968 年、pp. 896.

³⁸ 長崎で遊学中に英学を学んだ後、蘭医ボードウインの門下生となる。英国留学生として渡英したイギリスからフランスに留学先を変え、1868（明治元）年に帰国。帰国後は、薩摩藩開成所のフランス語教授となり、その後、政府に出仕して外交官として活躍。晩年は貴族院議員となる。

³⁹ 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第 4 巻、東洋経済新報社、1974 年、p. 48.

右は休業式ヶ月の初日ニ、兩人へ直接給料度候。尤白川（論者注：モンブランの私設秘書の白川（斎藤）健次郎のこと）へ差合の儀ニ、如欺取計可給候。

吉野・朝倉兩名。

右は仏行学生の儀、年分式百封度被成下筋粗取究置候」⁴⁰

仏国滞留学生は、壹ケ年宿料・衣服料・小仕迄式百封度にして、学講の雑費及教師料の儀は、官庫よ被成下候様相決候事⁴¹

朝倉らはモンブラン宅に寄宿し、フランスでの授業料、受講の雑費、宿泊代、衣服代などを藩より支給してもらい、良い待遇の中で勉学していたようだ。

朝倉はその後、コワニエの助手兼通訳として、また明治維新後は役人として生野銀山再開発に携わることとなる。

IV 幕末と外国人の来日

4.1 望まれないフランス人らの来日

コワニエの日本到着日については、明確な資料が残されていないが、モンブランと共に来日したと考えられてきた。まずモンブランの来日について当時の資料を基に見てみる。

ヨーロッパ視察を終えた五代は 1866（慶応2）年4月（論者注：以降、和暦で記す。必要な場合は新暦も付記する）、留学生らを残して一足先に帰国した。その1年後の1867（慶應3）年4月、パリで万国博覧会が開催されることになり、薩摩藩はモンブランの仲介で、独自に参加することになった。家老岩下方平⁴²を代表とする薩摩藩使節団は1866（慶應2）年11月10日（新暦：12月16日）鹿児島を出発し、1867（慶應3）年1月2日（新暦2月6日）にパリに着いた。薩摩藩は、薩摩藩および琉球王国の全権として、幕府とは別名義で参加・出品して、一国のように振る舞おうとして幕府と厳しく対立し、幕府は激しく抗議したことは有名であるが、この時に会場で通訳として活躍したのは朝倉盛明であった。

モンブランは、パリ万国博覧会参加後周辺諸国の視察を終えた岩下方平一行と共に、同年7月29日（新暦：8月28日）フランス・マルセイユから乗船し日本へ向かった。その様子は、岩下の日記「岩下方平航海日記」⁴³に記されている。

慶應二年寅のとしの冬、我國をいて夷の國に在けるか、事はてゝ明る年の文月の末に

⁴⁰ 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第4巻、東洋経済新報社、1974年、p. 52。

⁴¹ 同上、p. 56。

⁴² 岩下方平（1827-1900）通称は左次右衛門。薩摩藩士、明治時代の政治家。1863（文久3）年9月、薩英戦争の和平交渉の正使として交渉を担当。1867（慶應3）年のパリ万博に「日本薩摩琉球国太守政府」使節団長として藩士等9人を率いて参加。小松帯刀や西郷隆盛、大久保利通とともに藩政をリードし、倒幕活動に尽力した。

⁴³ 「岩下方平航海日記」、公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』中巻、原書房、1968年、pp. 1007-1030。

歸ることとなりぬ。市來政清岩下方美三人なり、外に異國人もともないぬれとあやしき名なればしるさす。七月廿九日、空はれたり、午の時はかり仏蘭西國「まるせい」といふ湊より船に乗る⁴⁴

その「異國人」の名は記されていないが、当時の状況からモンブランを指している。「岩下方平航海日記」によると、岩下一行の日本到着日は1867（慶應3）年9月22日（新暦：10月19日）であった⁴⁵。当時まだ開港していなかった鹿児島には直接入れず、まず、当時開港していた長崎に入った。

当時、長崎奉行が、外国人を開港場以外の地に連れていくことを禁じていたため、なかなか鹿児島行きの許可が下りず、長崎での待機を余儀なくされた。鹿児島に入れたのは長崎到着から約1か月半後の11月8日（新暦：12月3日）であった⁴⁶。このことについて、薩摩藩は同月6日、幕府に次のように説明し、許可を求めている。

当月（論者注：慶應3年11月）八日朝發船到候節、貴國人「モンブラン」儀、兼て薩州家の需に應し、同所鹿児島へ被相招、同家軍務に關係到、先頃中より用便の爲め長崎表へ滞在到候處、此度右船へ乗組、其他外國人共一同鹿児島表。⁴⁷

このモンブランらフランス人達の薩摩入りは、長崎奉行にとって好ましいものではなかった。同月、長崎奉行河津祐邦が幕府に「薩藩佛人「モンブラン」等をして軍事に興らしめ、又英國汽船の長崎に在るものを購入し、告げずして其藩に歸る」⁴⁸と幕府に告げた。これを受けて、幕府は、同月20日（新暦：12月15日）、在日フランス大使レオン・ロッシュに「貴國人「モンブラン」等、兼て薩州家へ被相雇居候儀は、貴國政府の免許を受候儀には有之間敷被存候に付、閣下に於て何とか御所置有之候儀に候哉」⁴⁹と薩摩藩雇用の許可を与えないようにと要請した。

4.2 モンブランとコワニエの入薩

モンブランの入薩は、薩摩藩内の一部で反対があった。即ち先の薩英戦争後、親英政策に傾いており、ベルギー人のモンブランは邪魔な存在となりつつあり、またモンブランとの商社の協定に不安を感じていた一部の英国留学生らの反対も起こっていた。藩の財政難も一つの理由であった。

⁴⁴ 同上、pp.1007-1008。

⁴⁵ 宮永孝も「ベルギー貴族モンブラン伯と日本人」（『法政大学社会志林』47号の2、法政大学社会学部学会、2000年、p.155）の中で同じ解釈をしている。しかし、ベルギーのモンブラン研究家、ウィリー・ヴァンデワラは「旅と政変—幕府明治初期を旅行したモンブラン伯（白山伯）」（白幡洋三郎編『旅と日本発見—移動と交通の文化形成勢力』日本研叢書43、国際日本文化研究センター、2009年）において、「モンブラン伯が1867年10月中旬から1869年12月末まで日本に滞在していたことは確かだが」と来日日について明言していない。

⁴⁶ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』下巻、原書房、1968年、pp.6-29。

⁴⁷ 同上、p.26。

⁴⁸ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』下巻、原書房、1968年、pp.25-26。

⁴⁹ 同上、p.26。

このようにモンブランらフランス人達の来薩は、一部には歓迎されないものであったが、1867（慶應3）年11月8日（新歴：12月3日）に薩摩藩の断行により鹿児島入りを果たしたモンブランは翌日の9日によく藩主の島津茂久公に謁見でき、歓待を受けた。しかし、8日に薩摩藩、9日には長州藩に倒幕の密勅が下り、同じ日の9日、徳川慶喜が大政奉還を申し出て、翌日朝廷はこれを勅許した。これにより江戸幕府は倒れ、王政復古となった。そこで、長州藩と呼応して、同月13日、茂久公（維新後忠義に改名）は急遽大兵を率いて上京しなければならなかった。このような事態から、薩摩藩としてはモンブランとの交渉どころではなく、モンブランらはすぐに長崎に返された。『薩摩海軍史』⁵⁰にはこの時のことを次のように書いている。

同月八日午前八時（七時三十分）長崎港を出航せり、同船には新納刑部、岩下左次右衛門、其他仏國の「モンブラン」他八人許（陸軍教師士官及び鑛山技師）同乗せり。而して本船は午後十時頃鹿児島に着し、翌日外客は田の浦元、清鏡院に寓居を定めたり、同十日には忠義公清鏡院を訪問せられ款待至らざるなし、而して同人等は暫時滞留したり、しかれども最早軍制改革の時期にもあらず、鑛山技師のみは鑛區に就き調査をなせしこと前に掲げし如し。（注：下線は筆者による）

この記述によると、モンブランの他にフランス人の陸軍教師と鉱山師、計8名が長崎から鹿児島に行ったようである。しかし、当時の史料の中に、モンブラン以外のフランス人の名前が記されている記録はなく、彼らの素性は明らかではない。薩摩藩に雇用されたはずのコワニエの名前も一切出てこない。コワニエと薩摩藩との契約書や当時の乗船記録などコワニエの来日について判る史料が全く残っていないのが現状である。記録の中に「鑛山技師」と書かれていることから、これまでの研究者はコワニエと判断してきた⁵¹。しかし一方で、宮永孝⁵²やウィリー・ヴァンデワラ⁵³のように、モンブランに関する論文の中で、コワニエについて全く言及しない、あるいはコワニエの存在すら把握していないモンブラン研究家もいる。著者は直接ベルギーのルーヴァン・カトリック大学の教授でモンブラン研究の権威であるウィリー・ヴァンデワラにコワニエについて尋ねてみたが、コワニエの存在すら知らなかった。

しかし、コワニエが薩摩藩に雇用されて鹿児島にいたことは間違いない事実である。例えば、コワニエは、所属していた鉱業協会⁵⁴にこの時期の肩書として«*Ingénieur de Sa*

⁵⁰ 同上、p.19。

⁵¹ 富田仁・西堀彰『日本とフランス—出会いと交流』、三修社、1979年、pp. 222。竹内博編『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ株式会社、1995年、p. 158。高橋邦太郎「生野鉱山学校」『仏蘭西学研究』第6号、1975年、pp. 3-4、など。

⁵² 宮永孝「ベルギー貴族モンブラン伯と日本人」『法政大学社会志林』47号の2、法政大学社会学部学会、2000年。

⁵³ ウィリー・ヴァンデワラ「旅と政変—幕末明治初期を旅行したモンブラン伯（白山伯）」『旅と日本発見—移動と交通の文化形成力』日研叢書43、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、2009年。W. F. Vande Walle, «An Extraordinary destiny: Count de Montblanc (1833-1894)» *Japan & Belgium: Four Centuries of Exchange, Japan*, 2005.

⁵⁴ 原語：La société de l'industrie minière。サンテティエンヌ鉱山学校の教員および卒業生

Majesté le Taishiou de Satsouma » (和訳：薩摩の大將閣下の技師) と申告しており⁵⁵、また、「工部省沿革報告」においても、コワニエについて「鹿児島藩ノ傭ヒシ所」と、鹿児島(薩摩)藩に雇用されていたことが記されており、モンブランと共に長崎から鹿児島に渡った「鑛山技師」はコワニエであるという判断は正しい。

上記記録に、鹿児島に来た「鑛山技師」＝コワニエは、鹿児島到着後「鑛山技師のみは鑛區に就き調査をなせしこと前に掲げし如し」と直ちに鑛山調査の開始を希望したことが記されている。実直であったコワニエの性格や日本での鑛山調査に対する意欲が窺える。

V お雇い外国人コワニエ

5.1 コワニエ来日時の秘話

コワニエの来日時の様子がわかる史料は、これまで皆無であったが、著者は長崎滞在中に記した1通のコワニエの書簡を発見することができた。それは、鑛山学校時代の先輩であり、親友であるサンテティエンヌ在住の鑛山技師、ポール・オジエ⁵⁶に宛てた1867(慶應3)年11月20日(著者注：これは新暦である。和暦では10月25日)付の書簡⁵⁷である。この書簡から来日直後のコワニエの行動や当時の日本の様子を推察することができる。

新出資料のため、できるだけ拙訳による全文(原文：フランス語)を掲載し、内容ごとに3つに区切って考察する。

長崎、1867年11月20日

親愛なるオジエへ

石炭のことを話しているわけですので、もう少しお話ししましょう。日本において興味深いことでもありますし、鑛山学校にとっても興味深い話になるかもしれませんから。この前、長崎の港の入り口付近にある炭鑛を訪問してもよいという許可を、藩公からいただきました。その炭鑛は、日本人が開発していて、石炭は日本から3日かけて中国へ送られています。この炭鑛は、玄武岩による石灰を含む土壌が隆起しているライン上にあり、地層はとても大きく変動しているのですが、ほとんどが砂岩層で構成されている中間層を観察すると、穏やかな水の中で堆積物が形成されたことがわかります。つまり、断層部分を除くと、石炭が一定の割合で含まれているのに違いなのです。私が訪れた炭鑛では、多くの起伏が観察できましたが、40メートル程の高さのところに0.8メートルから2.5メートルの層が5つあるのが見えました。最も厚

で創設された協会。

⁵⁵ *Bulletin de la Société de l'industrie minérale* (1866-1867, publié le 31 mars 1868)の中の会員名簿に記されている。

⁵⁶ ポール・オジエ (Paul Ozier, 1829-1908) 1854年、サンテティエンヌ鑛山学校卒業。

⁵⁷ この書簡は、1865年から1876年にかけてお雇い外国人として横須賀造兵廠、横須賀海軍施設や灯台、その他の近代施設の建設を指導したフランス人技術者フランソワ・レオンス・ヴェルニーの遺品である。長年子孫が自宅で管理した後、現在、サンテティエンヌのロワール県公文書館で保管(マイクロフィルム)されている。

い層と最良の石炭が採れる層は天盤部分に 0.5 メートルの片岩質の石炭が付いて平均 2.5 メートルありました。

良い部分はとても固く、石炭はとても輝いていて、非常によく網にくっつきます。丁寧に選別すると、つまり、天盤部分を取り分けると、石炭ガスを得るのに非常に優れていて、上海ではイギリスの石炭よりも好まれています。私が訪れた島のその他の層は純度が落ちますが、労働力が非常に安い（0.50フラン/日）（著者注：当時の円レート1フラン=20銭）ので、まだまだ有利に採掘を続けることができます。12%以上の灰分を含むものは全て、炭坑の鉱石置場において1トン20フランで売られていて、上海では1トン40フランです。選別された石炭は、イギリスの石炭と同じ値段、つまり、1トン50～60フランで蒸気船に売れます。日本人が蒸気船40隻の船団を持っていて、中国の蒸気船の数も300を超え、蒸気船1隻の消費量が1日平均15トンで、停泊中の蒸気船も同じですから、南シナ海と日本海で消費される燃料の量が想像できるでしょう。合計すると、1日4500トンになるのです。日本が供給しているのは約300トン、台湾とボルネオがその2倍程度、残りはイギリスとオーストラリアからですが、日本の石炭は良質で安価ですので、やがて近くの海域で商売を独占することになるでしょう。

日本では、北へ行くほど石炭を含む土壌が多くなります。その土壌は世界最大の炭田（その中心には北京があります）へと繋がっています。北から来た石炭が積み込まれるところを見ましたが、良質で、輝いていて、強い粘り気がありました。

近い将来、サンテティエンヌの生徒のための場所がここにできると思いますし、彼らを温かく支援したいと思います。

前節で見たように、11月8日（新暦：12月3日）にようやく鹿児島に行けたフランス人らは、政情不安から長崎にすぐに戻るように言われ、彼らの中で「鑛山技師のみ」⁵⁸つまりコワニエのみ「鑛區に就き調査をなせしこと前に掲げし如し」⁵⁹と、鉱山調査のために鹿児島に残ることを主張した。しかし、その後どうしたかが不明であったが、この手紙から長崎に返されてしまっていたことがわかる。

真面目で積極的なコワニエは、それでもどこかで鉱山調査をしたいと考え、滞在先の長崎で調査を願い出て許可を得て、炭坑の調査を行っていたようである。コワニエの鉱山に対する情熱が窺える。コワニエは詳細に炭坑を調べ、また、日本の石炭を高く評価し、将来有望であり、アジアの中心産業になることを見越していた。そして、炭坑開発には、母校の後輩にさせようと目論んでいたようである。

確かに、コワニエの推測どおり、その後、長崎周辺では、高島（1704年（宝永）頃 - 1986（昭和61）年）、瑞島（別名：軍艦島／1870（明治3）年-1974（昭和49）年）、池島（1952（昭和27）年 - 2002（平成14）年）、福岡では、三井三池（1721（享保6）年） - 1997（平成9）年）など、炭坑が発展し日本の産業の繁栄を支えた。

⁵⁸ 公爵島津家編纂所編『薩摩藩海軍史』下巻、原書房、1968年、p.19。

⁵⁹ 同上。

薩摩公のところで私たちの事業計画は、他の公卿たちのライバル意識を引き起こしました。複数の使者が、モンブラン氏に事業を率いてもらおうとして彼のもとを訪ねました。鹿児島到着の1か月後、非常に良質だという金山開発に着手した後、私はモンブラン氏と一緒に要請してきた彼らの領土の視察をすることになっています。恐らく彼らの鉱山のために技師を集めることになるでしょう。費用別で5万フランと出来高給が支払われます、こちらに来ませんか。来たいのであれば、色々と便宜を図りますし、ベストな場所を選びましょう。直ぐに手紙をくれるか、他の人に聞いてみて下さい。但し、2万フラン（論者注：または1万フラン。判読困難。）と言って下さい。こちらに来たい人たちの名前を教えてください。紹介し、伝えます。日本へ送られる手紙は、毎月12日・19日・28日にマルセイユから発送されますが、その前日までにマルセイユに届いていなければなりません。

薩摩藩とモンブランとの貿易会社設立の話やコワニエによる鉱山開発の話を知った他の藩の老中たちのからの取引希望、鉱山開発希望が次々ともたらされた。鉱山技師の需要の高さを察知したコワニエは今後大きく開発事業が行われることを予測し、友人やその友人を呼び寄せようとしていたことがわかる。

結果的には、コワニエは翌年、生野銀山に移ることになり、友人たちを呼び寄せることはなかったが、コワニエは生野赴任中、オジエに対し日用品や鉱山開発に使う機械類の発注やその仲介の世話をしてもらっていた。一方、オジエは、コワニエに日本で働ける鉱山を捜して仲介してくれるよう依頼していた⁶⁰。コワニエが帰国することになると、オジエはその入れ替わりに、コワニエの紹介で、コワニエが最初に鉱山開発事業に携わった鹿児島島の島津家の山ヶ野金山に、1878（明治11）年から1881（明治13）までの約4年間赴任した。『鉱業協会会報』⁶¹を確認すると、この頃の肩書として、「*Ingénieur aux mines de Yamaga-No-Kinsan-Kagosima-ken (Japon)*」（和訳：日本・鹿児島県・山ヶ野金山の技師）と書かれている。鹿児島市にはオジエの作成した『山ヶ野金山城実測図』⁶²が残っている。

私は、お分かりの通り、まだ長崎にいます。モンブラン氏が10月19日に着かれ、私は目的地へ向けてすぐに出発したかったのですが、日本の政治の遅さを計算に入れていませんでした。絶対的で非常に厳しい支配体制が敷かれているこの国の習慣としては、自分たちの高官の部下の意見を聞き、その同意がなければ何も実行されません。

⁶⁰ 日本におけるオジエについては、日本のオジエからフランスのコワニエ宛の書簡を解説付きでまとめた、矢島祐利「コワニエ文書について 鉱山技師コワニエとオジエの新資料」（ユネスコ東アジア文化研究センター、1970年）から知ることができる。また、オジエ研究については、澤護「ポール・オジエー島津家雇いの鉱山技師一」（『仏蘭西学研究』第20号、1990年、pp. 32-42）がある。

⁶¹ 原語は、*Bulletin de la Société de l'industrie minière*。フランス国立鉱業奨励協会（*Société d'Encouragement pour l'Industrie Nationale*）附属図書館で資料調査した。

⁶² 鹿児島市尚古集成館蔵。

反対は弱くなり、抵抗を示していた人々は納得してくれるようになりました。しかし、我々の側についた人たちは非常に自尊心が強く、後から軽率な人間だと言われないように、意見を公然と変えるにはある程度の時間を必要としています。公卿たちは我々に早く鹿児島へ行ってほしいと競い合っており、いずれ近いうちに鹿児島へ行って欲しいという指示を受けることになるだろうと確信しています。

コワニエ(サイン)

コワニエは、幕府の政治体制の悪さを指摘し、希望がなかなか通らず、事が早く進まない苛立ちを覚えていたことが読み取れる。

さらに、ここには見落としとしてはいけない重要な記述がある。それは「モンブラン氏が10月19日(著者注:新暦)に着かれ」である。前節で見た通り、モンブランが薩摩の岩下と共に長崎に到着したのは、旧暦の9月22日、新暦の10月19日であった。すなわち、「10月19日に着かれ(il est arrivé le 19 octobre)」は、モンブランが来日したことを指していると考えられる。もし他の場所へ行って再び長崎に着いたことを言うのであれば、「着く(arriver)」ではなく「戻る(revenirなど)」という表現を使うであろう。これまで、複数のフランス人がモンブランと共にフランスから来日し、コワニエがモンブランと共に長崎から鹿児島に渡った記録があることから、複数の歴史家や日仏交流の研究者より、コワニエはフランスからモンブランに同行して来日したと判断されてきた。それは、研究論文⁶³だけでなく文学作品⁶⁴、さらには人名事典⁶⁵にまで記されるようになり、この説がほぼ定説となっている。しかし、この書簡によりコワニエはモンブランよりも先に日本に来ていたと解釈することができる。もし書簡の作成日付が正しければ、コワニエは、長崎でモンブランと合流し、一緒に鹿児島に行ったと考えられ、コワニエ来日日の定説が覆される可能性がある。別の推測を立てるならば、コワニエは、岩下使節団一行よりも一足先の7月に帰国した薩摩藩英国留学生の一人、朝倉盛明と一緒に来日した可能性がある。朝倉は、モンブランの斡旋により英国留学からフランス留学に転換し、パリ万博でも通訳や説明役として活躍し、後にコワニエの通訳として生野銀山に赴任することになるが、それを考えるとき日本語を解さないコワニエが朝倉と来日することの可能性は極めて高いと言える。

このコワニエの書簡は、コワニエの来日直後の様子や感想、日本政府の動きについて、さらにはモンブランの到着に関する情報を得ることができる貴重な資料である。

5.2 明治新政府によるコワニエの雇用

薩摩藩でのコワニエの調査報告書は残されていないが、コワニエが1874(明治7)年に日本の鉱物資源について記した論文« Notes sur la richesse minérale du Japon »(邦題:

⁶³ 宮永孝「ベルギー貴族モンブラン伯と日本人」(『法政大学社会志林』47号の2、法政大学社会学部学会、2000年、p. 155。高橋邦太郎「生野鉦山学校」『仏蘭西学研究』第6号、1975年、など。

⁶⁴ 鹿島茂『妖人白山伯』講談社、2009年。

⁶⁵ 竹内博編『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ、1995年。

「日本鉱物資源に関する覚書」⁶⁶の中に「私は1年間に元薩摩藩の領土であった薩摩・大隅・日向の3国を回った。これらの国には、金・銀・錫・銅・の鉱脈を見出した」と綴り、山ヶ野金山の他、茅ヶ野、神殿、鹿籠鉱山について解説している。この記述から、コワニエが視察した鉱山を知ることができる。

このように薩摩領土内の鉱山を点検していたところ、コワニエは明治政府から官営が決まった生野銀山の視察の要請を受けた。『工部省沿革報告』に「(著者注：明治元年)九月(中略)佛國人「セアン、フランソワ、コハニー」鹿兒島藩ノ傭ヒシ所ヲ以テ鑛山師ト爲シ、而シテ但馬國朝來生野銅山⁶⁷ヲ檢視セシム」と記されているとおり、それまで鹿兒島藩(薩摩藩)に雇用されていたコワニエは、1868(明治元)年9月から、生野銀山に赴任することとなった。同年9月12日に当時外国官権判事をしていた五代友厚立ち会いのもと大阪外国官運上所と交わした「傭入約定書」⁶⁸が現在も残っている。五代は、これまでの活躍を明治政府に認められ、大阪に呼び寄せられ、与職外国事務掛に任命されていた。そして、モンブランも共に上京して、外交顧問格として五代を支えていた。生野銀山を至急開発する必要があった政府は、五代とモンブランの推薦もあり、既に日本に在住していたコワニエの採用を決定したのだと推察される。

コワニエは、9月の生野銀山視察後、一旦大阪に戻り、同年12月に本格的に生野銀山に赴任した。『工部省沿革報告』⁶⁹には次のように記されている。

明治元年十二月豊岡縣但馬國朝來郡生野鉱山開鑿ノ業ヲ創始シ公廨ヲ此ニ置キ以テ鑛山司生野出張所ト稱ス此ヨリ先九月會判事齋藤篤信齋鑛山官行ノ議ヲ建ツ政府乃チ之ヲ採用セラレ傭僱國人士質家「セアン、フランソワ、コハニー」ヲ以ッテ鑛山師兼鑛山學教師ト爲當鑛山ヲ討檢セシム。此ニ至テ遂ニ開鑿ノ業ヲ起シ、鑛山司判事試補朝倉靜吾一後ニ盛明ト改稱ス一ヲシテ之ヲ督セシム

コワニエは鉱山師兼教師として、そして朝倉は鉱山司に任官され、通訳兼監督役として生野銀山に派遣された。朝倉の採用も五代とモンブランによる推薦だと考えられる。二人のこれまでの連携プレイからは是が非でも生野鉱山開発を成功させたいという明治政府の強い思いと、日本語を解さず全く知らない土地で作業するコワニエへの繊細な配慮を見ることができる。

後年、朝倉は鉱山局長、コワニエは技師長となり、この兩名の手腕により生野鉱山は発展し、日本で最大級の鉱物資源の産出を誇るようになる。

⁶⁶ F. Coignet, « Notes sur la richesse minérale du Japon », *Bulletin de la Société de l'industrie minérale*, 2^e série, tome III (1874), pp. 473-554. 日本語の翻訳本も出版されている：石川準吉『日本鉱物資源に関する覚書—生野銀山建設記—』産業経済新聞社、1957年。

⁶⁷ かつては銅を主に採掘していた。

⁶⁸ 「傭入コワニー雇入約定書」早稲田大学図書館蔵、書写資料、請求番号：イ14A3991。

⁶⁹ 「工部省沿革報告」『明治前期財政経済史料集成』明治文献資料刊行会、1964年、p. 101。

VI おわりに

コワニエが来日したのは幕末の1868（慶応3）年であった。この年日本では、10月に大政奉還、12月に王政復古の号令がかかり、幕府は存続の岐路に立たされていた。翌年には、年号が慶応から明治に代わり、これまでの日本を統治してきた幕府に代わって明治新政府が誕生し、コワニエはまさに時代の大転換期に来日したのである。

重要な時代の証人であるにも拘わらず、これまでコワニエの来日経緯や薩摩藩との関係についての詳細な研究はなされてこなかった。本稿は、薩摩藩関連史料や新たに発掘した資料の精査と、そこから得た情報を当時の情勢を踏まえて時系列に沿って整理し、コワニエの来日についての考察を試みた初めての研究である。

本研究により、コワニエの来日ならびに生野銀山再開発の陰には薩摩藩が大きく関わっていたことが判明した。また、来日直後のフランスの友人に宛てた書簡の発見と解説は、従来知り得なかった、欧州人から見た幕末から明治維新へ政治体制の大転換に伴う日本社会の動乱や当時の世情など貴重な情報が明らかになった。

本稿はコワニエ来日に関わった人々の直接的あるいは時間的接点に関する信頼性の高い情報を与えるものである。本稿が新たな研究の基礎資料となり、各分野における研究の発展の一助になれば幸いである。

参考文献

1. 阿部牧郎『大阪をつくった男—五代友厚の生涯』文芸春秋、1998年。
2. ウィリー・ヴァンデワラ「旅と政変—幕末明治初期を旅行したモンブラン伯（白山）」『旅と日本発見—移動と交通の文化形成力』日文研叢書43、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、2009年、pp. 209-232。
3. 鹿島茂『妖人白山伯』講談社、2002年。
4. 公爵島津家編纂所『薩藩海軍史』（中巻・下巻）、原書房、1968年。
5. 小林正彬『政商の誕生 もうひとつの明治維新』東洋経済新報社、1987年。
6. 五代友厚七十五周年追悼記念刊行会『五代友厚秘史』五代友厚刊行会、1960年。
7. 佐江衆一『商魂』PHP研究、2003年。
8. C・モンブラン他（森本英夫訳）『モンブランの日本見聞記—フランス人の幕末明治観』新人往来社、1987年。
9. 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第一巻（伝記・書翰）、東洋経済新報者、1971年。
10. 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第三巻（鉱山・工業・商社・交通）、東洋経済新報者、1972年。
11. 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第四巻（雑纂・年譜）、東洋経済新報者、1974年。
12. 真木洋三『五代友厚』文芸春秋、1986年。
13. 宗野信彦「五代友厚—大阪物語続篇—」『直木三十五全集』6巻、示人社、1991年。

14. 明治文献資料刊行会編「工部省沿革報告」『明治前期財政経済史料集成』、1964年。
15. 吉田國夫「官營生野鉦山の先覚・朝倉盛明」『日本鉦業・昭和59年度春季大会研究・業績発表講演会』1984年。
16. 渡部修『功名を浴せず—起業家・五代友厚』毎日コミュニケーション、1991年。